

山口大学大学院医学系研究科

新任教授ごあいさつ

第 2 回 医学専攻眼科学講座教授

木村 和博



平成 28 年 11 月 1 日付で、山口大学大学院医学系研究科眼科学分野教授を拜命いたしました。この 11 月で着任 2 年目を迎えることとなります。この度は、山口県医師会報への原稿執筆の機会を賜り誠にありがとうございます。誌面をお借りし、山口県医師会の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。山口大学眼科は過去 6 代の教授により主宰され、前眼部疾患、緑内障疾患、網膜硝子体疾患の三つの柱を中心に幅広く眼科領域に対応してきた伝統ある教室です。

私は平成 7 年に山口大学医学部を卒業後、すぐに大学院に進むことを選択し、大阪大学大学院医学系研究科生理系博士課程に進みました。大阪大学では神経生化学教室に所属し、祖父江憲治教授のご指導のもと平滑筋の分化機構の解明を大きなテーマとし学位を取得いたしました。その後、京都大学大学院医学研究科に移り、神経細胞薬理学教室にて成宮 周 教授のご指導のもと、細胞骨格のリモデリング制御機構に関する基礎研究を行ってきました。この研究期間で、私は生化学、分子生物学的な研究思考並びに創薬の基礎を学ぶ機会に恵まれ、その後の私の山口大学眼科でのキャリアに多大な影響を与えたのは言うまでもありません。平成 15 年に山口大学眼科に戻ってからは、西田輝夫 教授のご指導のもと眼科専門医、指導医の資格を取得し、平成 22 年からは園田康平 教授のもと講師として診療、研究、教育に従事して参りました。診療では、網膜硝子体グルー

プに配属され、網膜剥離や難治性黄斑疾患など、数多くの難治性網膜硝子体疾患の診断・治療を手がけて参りました。研究は、眼表面のホメオスタシスの破綻の分子機序解明並びにその新規治療薬の開発を行ってきました。さらに、前眼部から網膜硝子体疾患にわたって、種々の難治性眼疾患の共通原因の一つである線維性増殖組織形成の治療に焦点をあて臨床・研究を現在も進めております。線維性増殖組織形成の抑制については、すでにくつかのヒット化合物を同定しており、今後はこれらをさらに発展させ、山口大学眼科発の新規薬剤の開発を進めて行く所存です。これからも、教室員一同力を合わせて、基礎研究から臨床応用に至るまでの一連の研究を包括的に行い、トランスレーショナルリサーチを実践し、山口大学眼科からオリジナリティーのある研究を進めて参りたいと思っております。

どの診療科も同様の悩みをお持ちだと思いますが、眼科においても都市部に医師が集中しがちです。山口県内でも比較的人口が多い県南部と、人口の少ない県北部で眼科常勤医師数の格差が見られます。医師が少ない地域では、必然的に眼科の幅広い領域を診られる医師が求められます。私たちは、そうした地域の医療ニーズに応えるため、専門に加えて眼科の幅広い領域に対応できる医師の養成を目指しています。そのため、大学では、私の専門の網膜硝子体疾患、緑内障さらに白内障・角膜疾患を含めた前眼部疾患を中心にバランスよ

くその診断・治療を研修の初期から積極的に指導しています。各人が、スペシャリティとサブスペシャリティを身につけつつキャリアアップしていけるよう心がけています。

山口大学眼科は、医局の中心として多くの女性医師が活躍しています。結婚、出産および子育てを経験しつつ、仕事と家庭の両立を実践しているロールモデルのような女性医師が多くおり、充実したキャリア形成しています。

山口大学眼科は県内の中核病院ですので、診療では、あらゆる眼疾患に対して幅広く質の高い眼科医療を実践、提供して参ります。同時に最先端の眼科技術、医療を積極的に取り入れつつ、数多くの先生方と連携をとり、地域医療にも積極的に貢献していきたいと考えております。近年では、

大学病院を中心に基幹病院、開業医の先生方と県内各地にネットワークが構築できつつあり、一歩ずつですが地域完結型の眼科医療を遂行できる体制が整ってきていると実感しております。

教室の大きな役割の一つは人材育成です。一人でも多くの優秀な医師、次世代を担う医師を育成し、医療、医学の発展のために貢献していきたいと思っております。山口大学眼科は非常に若い教室で、私を含めまして当科の教室員はまだ未熟です。山口県医師会の諸先生方には、今後も多大なるご指導・ご鞭撻を頂戴するかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

